

高齢体験のための教材とその学習効果

神 谷 ひ と み

要 旨 少子高齢化社会において介護福祉士に対する期待は大きく、養成学校の役割について質の向上を求められている現状がある。そこで高齢者を理解するために商品化された高齢者疑似体験セットは高額であり装着に時間を要することから、身近にある安価で装着しやすい商品の工夫を試みた。

疑似体験セットを実際に在学生及びオープンキャンパスに参加した高校生に体験して頂き、アンケート調査による教材の有効性、学習効果について検討した。

教材の工夫の効果は高齢者の理解について結果から有効であったといえるが、今後さらに学習効果を深められるよう継続していく必要がある。

はじめに

2004年総務省調査により敬老の日になんでの新聞発表で、9月15日現在65歳以上の高齢者人口(推計)は2484万人で、昨年より55万人増加し総人口に占める割合は19.5%と昨年より0.5ポイント増加し、65歳以上20%目前となった。さらに75歳以上は昨年より53万人の0.5%増と一層高齢化が進んでいることがわかと報じている。

このように高齢化が加速している少子高齢化社会において介護福祉士に対する社会の期待は大きい。そこで介護福祉士の養成校において介護の専門職の育成、質の向上を図るための介護技術は大きな役割を持つといえる。しかし、核家族化が進行する社会で生活する学生は、高齢者との関わりが希薄になっていることから、介護の対象である高齢者の日常生活を理解することは難しいといえる。

そこで高齢者に対する理解が深められるよう、体験学習用教材として簡易高齢者疑似体験セットを工夫し実施を試みた。

I 教材の目的、内容

1 簡易疑似体験セットの目的

基礎講義で高齢者の特徴についての学習のみではイメージが難しいため、疑似体験による身体的特徴を理解することで、介護福祉士としての共感的理解を深める。さらに心理的、社会的視野が広まり思考が深められることを目標としている。

商品化された高齢者疑似体験セット(うらしまた

ろう)は70歳代からの加齢によって生じる身体的機能低下や心理的变化を実感することにより、高齢者に優しい商品、サービスの開発、環境、社会作りに役立つことを目的に開発されたものである。しかし、1セットが高額であり、装着にも時間を要するという欠点があり、限られた時間内では体験できる学生が僅かとなる。この欠点を市販されている安価な商品を用いて組み合わせ、高齢者の身体的特徴が簡易に体験できるよう工夫した。

2 簡易高齢者疑似体験セットの内容

耳栓：老人性難聴を再現する。

眼鏡：色の濃いサングラスを用い視野狭窄、視力低下を再現する。

チョッキ：ポケットの多い商品を用いおもり2キロを前ポケットに入れ、加齢に伴う前傾姿勢を再現する。

サポーター：肘関節、膝関節に装着し筋力の低下に伴い関節が動きにくくなる状態を再現する。足関節の動きを制限し、爪先の感覚の鈍さ、足の運びの悪さによる躓きやすくなる状態を再現する。

おもり：両手関節、両足関節に各1キロのおもりを装着し筋力の低下による動きの制限を再現する。

手袋：ゴム手袋と綿手袋の二枚をはめ、指先の感覚の鈍さ、細かい作業能力の低下を再現する。

以上のセットでできる限り高齢者の身体的特徴に

近い体験ができる商品を選択工夫することができた。
また、欠点であるこれらの装着時間はおもりの装着のみ介助し、約5分程度で完了し、価格は1セット7.5千円から8千円程度に抑えることができた。

Ⅱ 方法

1 疑似体験の方法

次の項目について体験実施した。

- ① 簡易疑似体験セットを装着し約10分から15分程度、尚安全のために介助者が同行し実施した。
 - ・平坦な場所を歩行（室外、室内）
 - ・階段昇降、エレベーターの乗り降り
 - ・洋式トイレ、和式トイレの利用
 - ・ペットボトルのふたの開け閉め
 - ・携帯電話で時報を聞く
- ② 体験者にアンケート調査を行う。
- ③ 在学生については体験から学んだことについてのレポート課題を出した。
アンケートの内容は身体的特徴、心理状態を理解し、若者との違い、日常の接し方など身体的、精神的、社会的観点からの内容9項目、疑似体験についての意見、感想1項目とした。

的、社会的観点からの内容9項目、疑似体験についての意見、感想1項目とした。

2 実施対象者、時期

- ① 8月に実施されたオープンキャンパスに参加した高校生38名
- ② 高齢者の特徴について講義が終了し、I段階の施設実習が終了した在学生52名

Ⅲ 結果及び考察

1 実施結果

- 1、高齢者の身体状態が理解できた、ややできたと答えたのは、高校生64%、在学生72%であった。
- 2、高齢者の心理状態が理解できた、ややできたと答えたのは、高校生50%、在学生50%であった。
- 3、疑似体験による学習効果は大きく良く理解できる、ややできると答えたのは、高校生80%、在学生70%理解できたと回答している。その他詳細についてオープンキャンパスに参加した高校生は表1に、在校生は表2に示したとおりである。

表1. 高齢者疑似体験についてのアンケート調査：高校生

	よくできた	ややできた	できた	あまりできない	できない
1 疑似体験で高齢者の身体状態が理解できた。	40% (15)	24% (9)	18% (7)	13% (5)	5% (2)
2 高齢者の心理状態が理解できた。	21% (8)	29% (11)	32% (12)	13% (5)	5% (2)
3 若者との違いが理解できた。	55% (21)	21% (8)	11% (4)	8% (3)	5% (2)
4 日常の接し方が理解できた。	18% (7)	35% (13)	40% (15)	5% (2)	2% (1)
5 社会生活の注意点について理解できた。	26% (10)	35% (13)	32% (12)	2% (1)	5% (2)
6 日常どんな援助が必要か理解できた。	26% (10)	29% (11)	35% (13)	5% (2)	5% (2)
7 今後の介護に生かすことができる。	38% (14)	29% (11)	26% (10)	5% (2)	2% (1)
8 疑似体験による学習効果は大きく良く理解できる。	40% (15)	40% (15)	15% (6)	0	5% (2)
9 疑似体験前と体験後では介護に違いがある。	40% (15)	35% (13)	18% (7)	5% (2)	2% (1)

表2. 高齢者疑似体験についてのアンケート調査：在学生

	よくできた	ややできた	できた	あまりできない	できない
1 疑似体験で高齢者の身体状態が理解できた。	37% (19)	35% (18)	17% (9)	10% (5)	1% (1)
2 高齢者の心理状態が理解できた。	12% (6)	38% (20)	31% (16)	19% (10)	0
3 若者との違いが理解できた。	62% (32)	21% (11)	8% (4)	1% (1)	8% (4)
4 日常の接し方が理解できた。	17% (9)	31% (16)	42% (22)	10% (5)	0
5 社会生活の注意点について理解できた。	4% (2)	46% (24)	35% (18)	14% (7)	1% (1)
6 日常どんな援助が必要か理解できた。	10% (5)	51% (26)	28% (14)	10% (5)	1% (1)
7 今後の介護に生かすことができる。	35% (18)	29% (15)	29% (15)	6% (3)	1% (1)
8 疑似体験による学習効果は大きく良く理解できる。	29% (15)	41% (21)	23% (12)	6% (3)	1% (1)
9 疑似体験前と体験後では介護に違いがある。	25% (13)	42% (22)	27% (14)	6% (3)	0

問10の意見、感想についてオープンキャンパスに参加した高校生は次のように述べている。

- ・歩くのに疲れた。
- ・歩くのにももの凄くゆっくりしか歩けなかったので、筋肉トレーニングが必要だと思った。
- ・足を上げるのも凄く大変だった。
- ・足が重くて引きずる、バリアフリーではない所を試してみたい。
- ・ドアを開けるのも力が要ることがわかった。
- ・体が重くて高齢者の人はとても大変だとわかった。
- ・お年寄りの気持ちがよくわかった、少しでも安心してもらえるように勉強したいと思った。
- ・自分のおばあさんが毎日こんなに大変な思いをして過ごしていることがわかった。
- ・日常の何気ない事が危険に繋がるということを感じた。
- ・体験を通じて今後どのように接したらいいかということが少しわかった気がした。
- ・体験をどこかで生かせたらいいと思った。
- ・老人になるのは嫌だ。
- ・怖かった。
- ・手が滑った。

在学生の意見、感想は次のように述べている。

- ・もう少し長く体験してみたかった。
- ・高齢者の人がこんな身体なんだと理解できたが、心理まではわからない。
- ・体験で体の重さ、動きにくさが理解できた。
- ・一歩歩くだけでも大変だった。
- ・今まで感覚でしかわからなかったが、少しは理解できた。
- ・相手のことをよく考えて介護することが大切だと思った。
- ・体験によって思っていたより、高齢者の体が自由がきかないことが改めてわかった。
- ・眼鏡で見づらく色もぼやけてわからなかった。
- ・耳栓で耳が遠い人の理解ができた。
- ・耳栓をして内緒話をしようとしても、普通では大きな声に聞こえるらしい。
- ・耳栓で声が聞こえにくかった、隣でつぶやいたり、話しかけてくる声は聞き取りにくいので、高齢者に話しかけるときは、そばで大きな声で話しかけることが大切だと身をもってわかった。
- ・想像以上にコミュニケーションがとりにくかった。
- ・耳も聞こえにくいし、早口や普通の声で話されても聞こえないから、大きな声で耳元で話す必要が

あると思った。

- ・電話もはっきり聞こえず大変だと思った。
- ・皆が近くにいるのに耳栓をすると一人だけ取り残された気がした、この状態で自分がイライラしてきつい口調になったら、高齢者が傷付くだろうと思った。
- ・ボタン賭けがあると細かい作業がしにくいのがよくわかると思う。
- ・一つの動作、作業でもとても時間がかかる、なるべく無理しないようにして老化を防ぎ、高齢者がずっと健康でいられたらいいと思った。
- ・トイレに座ることもなかなかできなくて大変だった。
- ・トイレに座って立つときなど手すりがないと立ちづらい。
- ・トイレは様式でないとやりにくかった。
- ・階段を降りるのが大変だった。
- ・階段を降りるときに足がつかえた。
- ・足首のサポーターを付けたとき動きづらく、こげやすかった、階段で曲がりづらくて少し危なかった。
- ・足が重くて高齢者の歩く速度が遅いのも理解できた。
- ・高齢者に足が重いと言われたが、体験によってどんな重さか、動きにくいのかわかった。
- ・どのくらいのスピードちょうどよく、歩幅もどのくらいがいいのか前より少しわかった気がした。
- ・私たちは筋力が衰えていないのでできたが、筋力が落ちたら辛いと思った。
- ・その人達の身になってみないとわからないこともたくさんあった。
- ・何十年後にはこれが日常化するとすると気が重い。

2 簡易疑似体験セットの有効性と内容の検討

安価で身近な商品を用い簡単に装着できる簡易疑似体験セットは、実施結果からもセットの内容で述べた高齢者の身体的特徴は、十分に捉えられていたと考える。

今回セットの中のチョッキは洋服の上から着ることから、サイズは大きめのものを選択し、体格のよい学生にも十分対応できた。また、カラーも明るく、ポケットも目的のおもりが入るサイズとして、十分機能を果たした。しかし、身長差には対応できず、おもりの重心が下部にきてしまったため、同じ重量でも重く感じた可能性も考えられる結果があった。

サポーターに関してはほとんどの学生が、効果に

装着目的を達成したが、中に上肢、下肢の太さによる感覚の誤差として締め付けが強かったり、逆に効果的な締め付けが得られなかったこともあった。さらに学生の体力、筋力の相違に対して、筋力低下を目的に装着したおもりの重量についても体験の効果に差ができたと考えられる。これらは、講義で実施している時の学生の表情、実施中に発語が聞かれたり、観察した結果から得られたものである。今後、簡易疑似体験セットの目的をさらに効果的にするためには、体験する学生の体型に合わせたサイズ等も含め検討する必要がある。

視覚については口頭での説明により理解でき、学習目的は達成されたが、加齢によって生じる白内障による色覚変化、ぼやけて見えるという状態を体験するには、商品化された眼鏡の購入も検討する必要がある。

3 学習効果

オープンキャンパスに参加した高校生は、短時間で体験セットについての説明も無く、また高齢者の身体的、精神的、社会的特徴についての基礎学習も無い状態で体験した。しかし、簡易疑似体験セットの目的である高齢者の身体的特徴は理解できた。

簡易疑似体験から高校生の中には、自分の祖母に対して共感を抱き、相手に対する思いやりの感情も学び、さらには、何らかの形で生かせるようにしたいと、社会での自己の行動についても考える機会となる等、体験学習は目的以上の効果があった。

しかし、中にはただ重かった、疲れたと体験学習の内容の理解が十分できない状態で、未消化の高校生も存在した。この点については、参加者数に対処した人数が不足していたために生じた可能性もあると反省している。可能な限り、1セットに1名の対応で効果的な装着ができると、結果に違いがあったと考えられる。これはオープンキャンパスに参加する高校生の、予測を上回る参加数による誤算であり、今後の改善は可能である。

在学生については四月始の講義で高齢者の身体的、精神的、社会的特徴について基礎学習が終了し、八月にはⅠ段階の施設実習も終了していることから、体験による学習内容も具体的に表現されている。

またレポートの内容から総合すると、施設での体験で疑問に感じた点、説明のみでは十分納得のいかない点について、簡易疑似体験を通じて納得することができ、次の施設実習に生かしたいと答えている。

在学生のレポートからの抜粋

- ・高齢者の虐待がおきるのは何故か、体験によってわかるような気がする。
- ・一般の家や歩道には段差や破損してしまった箇所がある、この状態で長距離を歩くこと、公共の交通機関を使って移動することは大きな負担になると実感した。
- ・切符売り場で高齢者が遅いのが何故かわかった。
- ・駅のプラットホームやバスの停留所で両手で杖を掴み、全体重を杖にかけている高齢者を見かける。これは実際に体の重みから逃れられた、これは体験しなければ気づけなかったでしょう。
- ・携帯電話のボタンの大きさ、操作方法を簡単にすると良い。
- ・道路や段差の改善が必要な所に気づいた。
- ・動きたくないし、歩きたくない、できれば車椅子で行動したいと思った。だが、そこですべてその人に手を加えてしまったり、車椅子に乗ったりしてしまうと自立できなくなってしまい、寝たきりの状態になってしまい、脳の働きも鈍くなってしまいうということを自分が体験して改めて強く感じた。

このように身体的側面のみではなく、心理、社会的側面にも視野が広げられ身近な生活の中から、高齢者介護に対する理解がより深められた。さらに、介護する場合の自己の対応についても学習されているという結果が得られた。

しかし、全く簡易疑似体験の目的を理解できないで疲労感のみ感じたり、二度とこんなことしたくないと答えた一、二名の在学生も存在した。理由についてアンケートは無記名であるため不明であるが、今後具体的に調査し少数意見にも耳を傾け、改善していく必要があると考える。

4 今後の課題

- ・在学生の体験実施時期の検討について

レポートの中に「施設実習に行く前に高齢者をよく理解してから行きたかった。施設実習前に体験していたら、利用者との接し方にもう少し違った対応が出来たかもしれない。」という内容もあった。このことから、今回の実施時期で学習効果の目的は達成されたと考えるが、より効果的な時期についての検討も必要である。そこで、実施時期を三つに分けて検討した。

① 基礎講義終了後の場合

基礎講義終了、演習での簡易疑似体験を実施することで、知識と統合でき教育的効果は十分得られると考える。しかし、早い時期に実施すると、施設実習に行く時期との間隔が空きすぎてしまい、想起できる内容が半減し、共感的理解は十分得られないと考える。なぜなら学生との関わり、現代の学生観から経過を観察すると、終了したことは記憶に留めていない、全く忘れている、講義と施設実習の実際と結び付けられない等があり、再度指導が必要となる学生が多く存在している。また時間の経過に伴い記憶は半減していく、体験からの共感も新鮮なほど対人援助の実施には効果を発揮し、実践と結びつための学習効果は大きいと考えられる。

② 施設実習直前の場合

基礎学習は同時期に終了し、簡易疑似体験を施設実習に行く直前の演習で実施する。

この場合は基礎学習の想起を含め、施設実習での関わり方にも効果は高く、学習効果は十分期待できると考える。

③ 第1段階施設実習終了後

今回実施した時期であるが、基礎講義の学習施設実習での体験から感じたことや、疑問が疑似体験により一層理解が深まると考える。

なぜなら実施中の学生の学ぶ姿勢、実施後のレポートの内容から自己解決され、基礎学習からの点がきちんと個々の学生の中で、線で結び付けることが出来た結果と考える。

学生との関わりから興味のあることには集中し、興味の無いことには無関心な様子が多々見られ、自分から疑問を解決するという学習はほとんどされていないのが現状である。またマニュアル的に与えられたことはこなすが、施設実習では何故、どうして、どのようにしたらいいのかと考え、実践する場として様々な知識の広がりが見られる。しかし、本人の意識によって学習効果の大きさは異なってくる。

以上の点から現在の学生観をよく観察、理解し、学習能力、学習意欲、将来の専門職としての自覚等を含めた教育の展開ができるよう検討する。さらに、介護福祉士の質の向上につながる学習効果が得られるよう、検討していくことが重要な課題である。

・簡易疑似体験セットの商品内容の検討

今後でも在学生、高校生、その他多くの体験者の方

のアンケートを元に、さらに効果的なセットにしていくために工夫が必要である。また学生の学習効果のみではなく、一般の方にも簡単に高齢者の理解ができるよう、簡易疑似体験セットの内容と効果についての検討をするために、アンケート内容の検討を行い調査していく必要がある。

簡易疑似体験の商品は消耗品、半消耗品があるため寿命、取替え時期についても経過を見て定期的に予算計上していく必要がある。

おわりに

高齢者介護への社会的期待の多い介護福祉士の養成、専門職としての質の向上と養成校に対する期待、要求も大きく教育内容の検討も重要な課題となっている。

しかし、介護保険導入によって経済的問題から、施設雇用の条件に専門職以外の者も多く、介護は誰でもできる仕事、資格は付加価値という施設も存在する。このような環境の中で、いかに養成校での学習効果が高く、実践に結び付く教育がされるか、専門職養成校での基礎学習を充実し、相手の立場に立った実践ができ、また応用できる能力をつけるための学習を構築する必要がある。なお11月13日厚生労働省は、2006年より介護現場で働くための資格要件を介護福祉士に一本化する方針を発表した。

今回形態別介護技術演習での疑似体験から対象者を理解し、相手の立場に立った自立支援ができる。さらには、対象者のQOLの向上のための支援に結び付けられるよう、教材の工夫と学習効果の検討を元に、学生が理解しやすく学習効果の高い教育、福祉の専門職としての基礎が修得できる内容を充実させていけるよう継続していきたいと考える。

【参考文献】

- 1) 福祉士養成講座編集委員会 介護福祉士養成講座④第二版 形態別介護技術 中央法規 2004
- 2) 林泰史編著 会議福祉士選書・16 形態別介護技術Ⅰ 老人編 建パク社 平成16年
- 3) 三浦規 ケアのこころシリーズ⑩在宅でのケア
- 4) 見藤隆子著 人を育てる看護教育 医学書院 1993
- 5) 三好春樹著 身体障害学 雲母書房 2001
- 6) 社団法人長寿社会文化協会発行 パンフレット うらしま太郎